

Title	あとがき
Sub Title	
Author	古石, 篤子(Koishi, Atsuko)
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2014
Jtitle	リサーチメモ:「ことばの教育の、あした」を考える:多言語活動のすすめ ,p.57- 57
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	古石 篤子(編・著)
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO92001002-2014-002-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

あとがき

まごまごしているうちにORFからもう1年が経とうとしている。これはひとえに編集責任者である古石の責任である。本年3月末をもって慶應義塾大学を定年退職したものの、自由な時間は減りこそすれ増えはしなかった。その理由のひとつには、2月23日付で文部科学省や中央教育審議会など関係諸機関に対して、「グローバル人材育成のための外国語教育政策に関する提言—高等学校における複数外国語必修化に向けて—」という文書を提出したことが挙げられる。この提言は古石が代表を務める日本言語政策学会 多言語教育推進研究会が中心となってまとめたが、提出後も3月12日の慶應義塾広報室を通じてのプレスリリースをはじめ、その他、諸々の関連活動が続いている。提言では、中等教育において英語以外の外国語の導入が制度化されていない日本において、21世紀を生きる人材育成、そして国の経済活性化と安全保障の観点からも、英語のみでは不十分であり、外国語教育の多様化が不可欠であると主張している。小学校での多言語活動も、中等教育におけるより幅広い外国語教育へとつながっていくことにより、その意義も効果も大きなものになるはずである。(提言の詳細は次を参照されたい。<http://web.sfc.keio.ac.jp/~akak/download/Teigen.zip>)

提言に関してひと言付記すれば、上記のプレスリリースには、残念ながらマスコミの反応は皆無であった。しかしその数ヶ月後、慶應義塾大学SFCが外国語の入試において、いわゆる「東大方式」というものを採用し、英語の他にフランス語とドイツ語も一部選択可能にする旨をプレスリリースした際も反応はなかったと言う。これには正直驚いた。英語に関することだとマスコミも大騒ぎするが、外国語に英語以外の言語を導入することの「意味」が理解されていないのではないかと思わざるをえない。そのような社会で「多言語」とか「複言語」などの意義を説くことは困難なことではあるが、社会が確実に多民族・多文化・多言語の方向に向かっている以上、一歩先をにらんで歩むしかない。

さて、ORFからこれほど多くの時間が経ってしまったので、他の共同執筆者たちには大変申し訳ないと思っている。けれども、今読み返してみても、どの論考も力作で、「賞味期限」を感じさせない新鮮なものであることを再確認したので、ここに自信をもって世に送り出したいと思う。日本における多言語活動、および外国語教育の多様化に少しでも寄与することができれば幸いである。

2014年11月

古石 篤子